

第2日目 2024年9月8日(日)

午前の部 10:00~12:30

テーマセッション(3)

産業・地域から家族と労働をとらえなおす

オーガナイザー・司会 嶋崎尚子(早稲田大学)

討論者 片岡佳美(島根大学)

【企画趣旨】

本企画は、2020年に「産業・地域変動と家族のライフコース：新たな実証研究の可能性」の後継セッションである。同セッションは1970年代からの「家族社会学の自閉化」や「マクロな社会構造との連関の上で家族をとらえる視点の欠如」(牟田1998:120)という指摘への挑戦であった。その成果は『家族社会学研究』(第33巻第2号)特集「産業・地域から家族と労働をとらえなおす—新たな実証研究の可能性」にまとめた。われわれは、その後も「産業・地域と関連づけて家族の動態をみると、何がみえるのか」を問い続けている。農業、石炭産業、織物業を主軸に産業・地域における家族の動態的特性を地域性、産業構造との連関から説明する試みである。近代家族論からは外れる、既婚女性の就労、子どもの進路選択、家族・親族ネットワークに焦点化し、生活構造、自営業・副業を含めた就業形態、家族戦略、家族意識の多層性・多様性の析出を目指している。

本セッションでは中間成果を5本報告し、学会員との議論の場としたい。第1報告は、愛知県西部から岐阜県南東部にまたがる尾州毛織物産地を例に、「家」を基盤とする「小経営」家族の実態と変容を、地域の産業変動と関連づけて検討する。第2報告は、福井県の織物産地における織物業の女性労働者と女性教員に注目し、継続的就業女性が地域の労働文化と家族のなかでいかにして自己決定権を模索したかを検討する。第3報告は、「日本人の意識」調査による計量分析から、戦中・戦後の既婚女性の家族意識のトレンドをたどる。第4報告は、高度成長期における炭鉱労働者子弟・子女の中卒後進路に注目し、企業学校等を経て衰退産業に残った家族の戦略を検討する。第5報告は、1950年代の〈社宅都市〉三池を対象に、産業特性(石炭産業、重化学工業、製造業等)が、社宅での家族・コミュニティのあり様、文化規範を規定する動態を検討する。